Transformation, Addition, and Disappearance in the Representations of Venus from the Roman Imperial Period to the Renaissance

TORIGOE Teruaki J. I.

Keywords: Venus; representation; Roman imperial period; Augustus; *Divine Comedy*

Abstract

I have considered the representations of Goddess Venus in well-known texts from the third century BC to the fifteenth century AD, paying particular attention to those from the first century BC to the second century AD.

Venus is a deity essentially so different from the Christian God that whether she is conspicuous in a Christian society can be a barometer to measure the strength of Christianity. Dante's *Divine Comedy*, in which the goddess is inconspicuous, is a reflection of the strength of Christianity, whereas the rebirth of the goddess after Poliziano and Botticelli is a reflection of the weakening of Christianity.

Another interesting fact about Venus is that she acquired the power of guardianship over the state of Rome since the second Punic War, especially since the first century BC. The texts written around this period suggest that one cause of this addition was the legendary foundation of Rome by Aeneas, a son of Venus, and that another cause is her apparent support of Rome in the crisis of the Punic War.

I have, however, as a cause for Venus' added power of the guardianship over Rome, laid particular emphasis on the succession to the name of "Caesar" by Octavius and later emperors of Rome and on the succession to the name of "Augustus" by Tiberius and later emperors. Their succession to the names of "Caesar" and "Augustus" was not a superficial assumption, but a substantial act of continuation. Octavius

became another Caesar when he acquired the name, and Tiberius became another Caesar Augustus by acquiring these names.

In relation to the succession to the name of "Caesar" by Octavius, we notice an interesting series of political manoeuvres surrounding the Goddess Venus by Julius Caesar and Octavius. Julius Caesar tried to strengthen his position by emphasizing his descent from the goddess. Octavius, in becoming "Julius Caesar" by the latter's adoption, could claim to his own descent from the goddess. Octavius' establishment as the absolute ruler of the state also established the credibility of Julius Caesar's descent from Venus and the guardianship of this goddess over the state of Rome.

During the Roman imperial period, the power of the emperor and that of the state were indistinguishable; this was also true during the time of Emperor Hadrian, who acquired the names of "Caesar" and "Augustus." An interesting legacy of this indistinguishability is the Temple of Venus and Roma for the worship of both his ancestors and the Roman state.

ヴィーナスの表象の変容、付加、消滅
——帝政期ローマからルネサンスへ——

鳥越輝昭

はじめに

ヨーロッパ文化史のなかでは、女神ヴィーナス（ウェヌス Venus）がルネサンス期に華やかに復活を遂げ、以後もっぱら一九世紀後半まで、多くは絵画を媒体としながら描かれ続け、命を保った。

ヴィーナス復活の先鞭を付けたのは、おそらくフィレンツェの古典学者・詩人のポリツィアーノ（Angelo Poliziano, 1454-1494）である。その中編詩『ピエロ・デ・メディチの御曹司ジュリアーノの馬上競技に際し書き始めた詩連 *Stanze cominciate per la giostra del magnifico Giuliano di Piero de' Medici*』（一四七五～七八）のなかでは、狩猟を好み恋愛を軽蔑しているユーリオ（ジュリアーノ）に、クピド（Cupido; Cupid）が詐術を使って恋をさせる。クピドはストーリー展開の軸であるから詩のなかに頻繁に登場するが、その母親であるヴィーナスも大きな存在である。ひとつの場面で、ヴィーナスはつぎのように描き出される。

女神は波のなかから現れ、右手で髪の毛をしぼり、左の手で柔らかな胸を覆う。神聖な足に踏まれると、海辺は草や花々を身にまとう。この上なく美しい嬉々たる相貌で、三人のニンフの膝に抱き留められ、星で飾られた衣で覆われる……[1]〔Poliziano, 101–108〕。

その少しのち、ポリツィアーノと同様にメディチ宮廷の庇護を受けていた画家ボッティチェッリ（Sandro Botticelli, c. 1445–1510）も、ヴィーナスを主題として『春 *Primavera*』（一四八二頃）、『ヴィーナスの誕生 *Nascita di Venere*』（一四八二～一四八五）、『ヴィーナスとマルス *Venere e Marte*』（一四八三頃）を描く。その二〇数年後には、ヴェネツィアのジョルジョーネ（Giorgione, c. 1478–1510）が、『眠るヴィーナス *Venere dormiente*』（一五〇七～一〇頃）を描き、これがその後の横たわるヴィーナス画の先駆となった。同じ一六世紀には、やはりヴェネツィアのティツィアーノ（Tiziano Vicellio, 1488/1490–1576）が室内にいるヴィーナスを描きはじめて、『ウルビーノのヴィーナス *Venere di Urbino*』（一五三八）や『鏡のヴィーナス *Venere allo specchio*』（一五五五頃）などの作品を制作した。さらにヴィーナスは、アルプスの北でも描かれるようになり、ドイツのクラーナッハ（Lucas Cranach der Ältere, 1472–1553）が、『ヴィーナスとキューピッド *Venus und Amor*』（一五〇九）や『パリスの審判 *Das Urteil des Paris*』（一五二八）、『ヴィーナス *Venus*』（一五三二）などを描いた。やはり、同じ一六世紀には、イタリアで、『メディチのヴィーナス像 *Venus de' Medici*』や『コロンナのヴィーナス像 *Colonna Venus*』など、地中に埋もれていた古代作成のヴィーナス像が発掘されていった。こ

の世紀末から一七世紀にかけては、文学の分野でも、シェークスピア（William Shakespeare, 1564–1616）の『ヴィーナスとアドーニス *Venus and Adonis*』（一五九三）や、ラシーヌ（Jean Racine, 1639–1699）の『フェードル *Phèdre*』（一六七七）（ヴィーナスが重要な役割を果たす）などが書かれた。その後、絵画の領域では、ブーシェ（François Boucher, 1703–1770）の『ヴィーナスの勝利 *Le Triomphe de Vénus*』（一七四〇）や『化粧するヴィーナス *La Toilette de Vénus*』（一七五一）、『ヴィーナスの誕生 *La Naissance de Vénus*』（1754）などを経ながら、一九世紀後半のブグロー（William Adolph Bouguereau, 1825–1905）による『ヴィーナスの誕生 *La Naissance de Vénus*』（一八七九）あたりまで、ヴィーナス画は西洋絵画の重要な画題をなしていた。その間、一九世紀前半には、地中海のミロス島で発見（一八二〇年）された『ミロのヴィーナス像 *Vénus de Molo*』がフランスの国宝的所有物となったことも忘れてはならない。

右に例として挙げたヴィーナスたちは、一部の例外を除いて、美しい女神として描かれ、多くは裸体でエロティックであり、おそらく半数ほどは私的な場面において描かれており、われわれは、それらの特徴を不思議に思わない。

しかし、都市ローマに残る、ヴィーナス関連の重要なひとつの遺跡のことを考えてみるとき、私的な場面でエロティシズムを発散する女神とはあまりに懸隔が大きくて、驚かされる。その遺跡とは、ふたりの女神を一緒に祭った「ヴィーナスとローマの二重神殿 Aedes Veneris et Romae; Temple of Venus and Roma」である。この神殿は、古代には都市ローマの中心地区であった小高い丘の上に建てられ、一方が政治の中心フォロ・ロマーノ（フォルム・ロマーヌム）を向き、もう一方は巨大な闘技場コロッセウムを向いていた。「ヴィーナスとローマの

Temple of Venus and Roma
（Wikipedia Commons）

二重神殿」は、フォロ・ロマーノとコロッセウム方向に伸びる長辺が一〇五メートル、幅が四八メートルの壮大な建物である〔Monti, 22〕。長辺側には二〇本の円柱が並び、コンクリート造りながら一面に白大理石で覆われ、タイルは青銅に金メッキを施してあった〔Richardson, 409〕。これは、古代に都市ローマで建設された「おそらくは最大のもっとも壮麗な神殿」だったのである〔ibid.〕。紀元後一二一年、ハドリアーヌス帝（Caesar Publius Aelius Traianus Hadrianus Augustus; Hadrian, 76-138）の下で建設が始まり、献堂は一三五年であったらしい〔ibid.〕。

この神殿について興味深いのは、祭壇が背中合わせにふたつあったことで、祭壇の神像はフォロ・ロマーノを向いていたのが女神ローマ、コロッセウムを向いていたのがヴィーナスであ

る〔ibid.〕。ふたりの女神を背中合わせに配した祭壇のこの形態は、女神ローマのまたの顔はヴィーナス、ヴィーナスのまたの顔はローマと考えるのが適切だろう。つまり、このふたつの女神は、異なる現れ方をする同一の存在だということである。しかも、この神殿が皇帝の肝いりで建設されたということは、これらふたつの顔を持つ女神がローマという国家によって祭られたということであり、いいかえれば、女神ローマ＝ヴィーナスが、国家の守護神として祭られたということである。

そうなると、ルネサンス期にポリツィアーノやボッティチェッリなどによって女神ヴィーナスが復活した際には、ローマ国家の守護神としての権能は忘却あるいは棄却されたということになる。

ヴィーナスの持っていたこの国家の守護神として権能は、これから述べるように、古代ローマにおいて付加された特徴だった。

以下の拙文は、古代ローマ期に女神ヴィーナスに生じた変質と付加とその理由を、ヨーロッパの教養人であれば誰もが知っていた文学作品や史書のなかに探る試みである。

一　『神曲』における希薄なヴィーナス

ダンテ（Dante Alighieri, 1265-1321）の『神曲 *Divina Commedia*』（一四七二）について驚くべきことのひとつが、女神ヴィーナスの存在の希薄さである。それというのも、「はじめに」でふれたように、のちのルネサンス期以降にヴィーナスが華やかな存在を見せるのと比べて、差があまりに大きいからである。

しかし、ヴィーナスとの関連でいえば、『神曲』については、もうひとつ驚くべきことがある。ダンテがこの作品を書くにあたって強く意識していたウェルギーリウス（Publius Vergilius Maro, 70–19 BC）の『アエネーイス *Aeneis*』（前一九）のなかでは、ヴィーナスが欠くべからざる存在として扱われていて、それとの差があまりに大きいのである。

『神曲』は、周知のとおり、著者のダンテ自身が、生き身のまま地獄・煉獄・天国をめぐった体験を報告する体裁を取っており、地獄と煉獄の案内人を務めるのがウェルギーリウスである。

ダンテがウェルギーリウスを案内人に仕立てた理由は、あきらかにふたつある。理由のひとつは、この先輩詩人とその作品『アエネーイス』とに対する敬愛の深さである。『神曲』の冒頭で、語り手ダンテは、ウェルギーリウスの霊魂に出会って、つぎのようにいう。

> あなたは、あのウェルギーリウス、言語の大河の源となられたあのお方なのですか。…〈中略〉…すべての詩人の誉れと光であるお方、わたくしがご著書『アエネーイス』を長年研究・愛読してきたことをどうぞご考慮ください。あなたは、わたくしの師、わたくしの手本です。わたくしの栄誉である美しい文体も、すべてあなたから学んだものです〔Dante, *Inferno*, I, ll. 79–87〕。

ダンテがウェルギーリウスを案内人に仕立てたもうひとつの理由も明白である。それは、ウェルギーリウスがすでに『アエネーイス』のなかで（第六書）、主人公アエネーアスに生き身のまま死者たちの居る地中の世界を

探訪させていたからである。アエネーアスは、亡父に会うために、巫女シビルを案内人として冥界へ下り、悪事を働いた者たちが罰せられているタルタロスや、善良な亡霊たちが転成を待つエリシウムを巡った。したがって、ウェルギーリウスは、自身には既知の場所へダンテを案内するのにふさわしいと見なされたのである。

さらに、アエネーアスのこの冥界廻りについては、細部も『神曲』のなかで活かされている。たとえば、どちらの作品でも、冥界へ行くにはステュクス川を渡るのであるし、川は船頭カロンの操る小舟によって渡るのである（『アエネーイス』第六書、三八四～四一六行、『神曲』地獄篇、七〇～一二九行）。そして、冥界で父親に出会ったアエネーアスは三度、父親の首を抱こうとして、三度とも空をつかんでしまったが（『アエネーイス』第六書、六九九～七〇二行）、それと同様に、『神曲』の煉獄で親友と出会った語り手は、三度相手の背中に両手を回そうとして、三度とも自分の胸を抱いてしまう（『煉獄篇』第二歌、七六～八一行）。

しかし、女神ヴィーナスの扱い方に注目しながら『神曲』の記述を見ると、『アエネーイス』を長年研究・愛読してきた作者によるものとは思えないほど異なっていて驚かされる。『神曲』のなかのヴィーナスへの言及はわずかに三箇所しかなく、それぞれが軽微である。

第一に、煉獄の険しい山を登ってきた語り手ダンテは、情欲の罪を清めている魂たちが、「女神ディアナは森に留まり、ヴィーナスの毒を受けたニンフのヘリケを放逐した」と唱えるのを耳にする（「煉獄篇」第二五歌。一三〇～一三二行）。これは、配下のニンフがユピテル神の誘惑により純潔を失ったのを女神ディアナが罰したことを称えているのである。情欲をかきたてる存在としてのヴィーナスへの軽微で批判的な言及である。

第二に、煉獄の山を登り詰め、エデンの園に入った語り手は、歌を歌い花を摘みながらやってくる婦人を見る

（「煉獄篇」第二八歌）。その婦人の眼の輝きを、語り手は、「あろうことか息子クピドの矢に射られたときのヴィーナスの睫毛の下でも、これほどの眼の輝きが見られたとは思えない」と例える〔同、六四～六六行〕。これは、クピドがヴィーナスに口づけした際に、箙（えびら）に入れていた矢の穂先が当たり、ヴィーナスがアドーニスへの恋情を抱くことになった出来事への言及である。この例えは、読者に、恋をした女神の眼の輝きの強さを引き合いに出し、それにも勝る輝きを想像させて巧みだが、ヴィーナスについては、伝承されてきた逸話のひとつを軽く利用しているにすぎない。

第三は、「天国篇」第八歌に見られるヴィーナスの星、すなわち金星への言及である。

> 世界の人々は、危険なことに、昔は、キプロス生まれの美しい女神ヴィーナスが天の第三周転円を回転すると、愚かな愛の光を発すると信じ、古代の過誤のなかにいた人々は、敬して犠牲を捧げ、奉献の叫びをあげたばかりか、ディオーネには女神の母として、クピドには女神の息子として敬意を表した（Dante, *Paradiso*, VIII, ll. 1-8）。

ここでダンテは、キリスト教の立場から、古代異教の占星術に見られたヴィーナス＝金星への態度を批判的に取り上げるとともに、キリスト教の唱える愛とは異質の劣悪な愛＝情欲を批判している。

ダンテ『神曲』のなかに見られる女神ヴィーナスへの言及は、以上の三箇所だけであり、全体で百歌、一四、二三三行からなる長編詩のなかでは、扱いがいかにも軽い。また、右の第二の言及は「美の女神」としてのヴィ

ーナスに関わり、第三の言及も「美の女神」としてのヴィーナスに軽くふれているけれども、ヴィーナスへ言及する際のダンテの主眼は、偽りの「愛」＝情欲をかきたてる存在への批判にあるといってよいだろう。

ところが、ダンテが師とあおいだウェルギーリウスの『アエネーイス』のなかのヴィーナスは、扱いの軽重の点で明らかに異なっていたし、情欲をかき立てる存在という側面についても扱いが異なっていたし、さらに、『神曲』ではまったく取り上げられていない側面が前面に出されていた。

そもそも、『アエネーイス』の全一二書、九、八九六行のなかには、ヴィーナスへの言及が五三箇所もあり、『神曲』の三箇所とは比べものにならないほど多かった。しかも『アエネーイス』におけるヴィーナスへの言及の多さは、そのまま作品におけるこの女神の役割の重要さにつながっていた。

『アエネーイス』のなかのヴィーナスの役割は、息子のアエネーアスを守り、助力を与え、ローマを建国させることである。『アエネーイス』は、ギリシア連合軍の攻撃によって滅ぼされた都市トロイアの将軍アエネーアスが、家族と守護神を守りながら、部下たちを連れて落ちのび、三種の苦難――海難、女難、激戦――を乗り越えて、のちの都市国家・帝国ローマの礎となるまでを物語る。この叙事詩のなかで、女神ヴィーナスは、トロイアの将軍アンキーセスとのあいだに生まれた子供であるアエネーアスを終始、守り助けつづける。それは表面的には愛情深い母親としての行動だが、重要なのは、その行動がアエネーアスに与えられたローマ建国という使命と運命の実現を可能にするために必須のものだという点である。

ヴィーナスは、まず、トロイア陥落に際して、アエネーアスとその家族を救う（第二書）。トロイアの町がギリシア軍に攻め込まれ、猛火に包まれ、陥落寸前の状態となったなかで、アエネーアスはヘレネーが町を逃れよ

うとしているのを見かけ、怒りに駆られ、殺そうとする（第二書、五六七～五八七行）。この大戦争は、トロイアの王子パリスが、スパルタ王妃のヘレネーをトロイアに連れてきて妻としたことが原因で生じたものだったからである。ところが、アエネーアスがヘレネーを殺そうとしていると、ヴィーナスが姿を現し、そのような愚行を思いとどまり家族を守るよう言い聞かせる。さらに、ヴィーナスは、ギリシア軍に襲われたアエネーアスの家族を自分が守ったことを告げるばかりでなく、アエネーアスを先導し、街中で破壊と殺戮をつづけるギリシア軍から危害を与えられないように守りながら、家族のいる家まで案内するのである（同、五八八～六三三行）。

トロイアを落ち延びたアエネーアス一行の船団が嵐に遭遇し、北アフリカのカルタゴに漂着したときにも、ヴィーナスは姿を現す（第一書、三一四行）。女神はアエネーアスに、漂着した場所がどこであるのか、支配者の女王ディードがどのような人物であるかを教え、ディードの宮殿に向かうよう指示する。そして、進むべき道を示すとともに、アエネーアス一行の安全のために、姿が見られないように厚い雲で覆ってやる〔三三五～四四〇行〕。

ヴィーナスは、また、敵対する女神ユーノの企み、すなわち、アエネーアスを恋したディードにアエネーアスと肉体関係を結ばせるのを許すが（第四書、九〇～一二八行）、それは異郷カルタゴに来たアエネーアスがそこで安全に過ごせるようにするためだった。ユーノの方は、終始アエネーアスの使命・運命であるローマ建国を阻もうとする存在であり、このときも、アエネーアスとディードを深い仲にしてアエネーアスのイタリア行きを阻もうとした。アエネーアスを守ろうとするヴィーナスと、アエネーアスの邪魔をしようとするディードの利害がこのとき暫時一致したのである。

さらにヴィーナスは、海を支配する神ネプトゥーヌスを説得して、シチリア島からイタリアへ向かうアエネーアス一行の航行の安全を確保する（第五書、七七九～八二六行）。

アエネーアス一行がイタリアに到着し、現地勢力と戦わねばならなくなると、ヴィーナスは、夫婦仲が良くないが優秀な鍛冶職人であるウォルカーヌスを肉体的に悦ばせ、頼み込んで、アエネーアスのために貫通不可能な巨大な盾を作成させる（第八書、三七〇～四五三行）。

イタリア現地軍との戦闘でアエネーアスが投げ槍によって負傷し、医師が槍の穂先を抜き取ることにも傷の治療にも難渋するばかりか、敵軍がアエネーアスの陣地に迫る状況になったときにも、ヴィーナスは重要な助けを与える（第一二書）。ヴィーナスは、遠く離れたクレタ島の山中から、刺し傷に効力のある薬草を採って来て、それを水盤に入れ、アンブローシアと万能薬とに混ぜる。この水盤の水で洗うと、アエネーアスに刺さった槍の穂先は抜け落ち、傷もたちどころに癒え、アエネーアスは元気を回復して戦場に復帰する（同、四一一～四四〇行）。

こうして、アエネーアスとその一行は、陥落するトロイアを落ち延びる段階から、イタリアの戦場での勝利まで、要所要所でヴィーナスの助力があったればこそ、難境を乗り越えることができた。つまりは、アエネーアスは、ヴィーナスの助けがあったからこそ、使命であるローマ建国を成し遂げることができたのである。ウェルギーリウスは、『アエネーイス』全編を通じて、アエネーアスの守り神としてのヴィーナス、言い換えれば、ローマ建国の功労者としてのヴィーナスを描いていたといえる。

ウェルギーリウスを師と仰いだダンテの『神曲』から、ヴィーナスの姿がほとんど消滅していることについて、

そしてローマ建国の功労者という側面が完全に欠落していることについて、われわれは驚くべきである。そして、その背景として、ダンテの時代までのキリスト教社会が、それほどまで徹底的に異教の女神ヴィーナスの存在を抑圧していたことに、あらためて驚いてよいのである。

二　ローマにおけるヴィーナスの地位向上と権能の付加

一般に女神ヴィーナスは、古代ギリシアの女神アフロディテ（Ἀφροδίτη; Aphrodite）と同一の存在と見なされがちだが、かならずしもそうではなく、アフロディテからヴィーナスに至るあいだに変質が生じ、重要な権能も付加された。

古代ギリシアのアフロディテは、美しいけれども――そして多くの場合は美しいゆえに――やっかいな恋情を引き起こす存在、トラブルメーカー、浮気者、残酷な存在、弱虫、というネガティブなイメージを伴う存在だった。

ヘシオドス（Ἡσίοδος; Hesiod, 8 century–7 century BC）の『神統記 Θεογονία; *Theogony*』（前七〇〇年頃）のなかでは、アフロディテは「娘らしいおしゃべり、微笑、奸計、快楽、恋情、優しさ」を特徴とする女神として紹介されていた〔Hesiod, *Theogony*, ll. 205–206〕。「奸計」を弄する否定的な側面と、「恋情」というやっかいな情熱をかき立てる存在という側面がふくまれていることに注目したい。

ホメーロス（Ὅμηρος; Homer）の作と伝承されてきた『イリアス Ἰλιάς; *Iliad*』と『オデュッセイア

Ὀδύσσεια; *Odyssey*』（前八世紀頃）については、第一に、これら二作を意識しながら書かれたウェルギーリウスの『アエネーイス』の場合と比べて、アフロディテ＝ヴィーナスへの言及がかなり少ないことに注目すべきだろう。『アエネーイス』では、すでに見たとおり、ヴィーナスへの言及が五三回なされていた。しかしアフロディテへの言及は、『イリアス』（全二四巻、一五、六九三行中）では三〇回、『オデュッセイア』ではわずか（二四巻、一二、一〇九行中）一四回に過ぎなかった。とりわけ『イリアス』の場合には、『アエネーイス』の一・五倍の行数のなかでの言及の少なさである。しかも、『イリアス』と『オデュッセイア』における言及の多くは、女性の美しさをこの女神に例える目的で使われていた。

作品のなかで直接的に言及されるわけではないが、『イリアス』と『オデュッセイア』の背景としては、トラブルメーカーとしてのヴィーナスがおそらく何よりも重要だったはずである。なぜなら、トロイア戦争というギリシアとアジアとのあいだの大戦争は、そもそも、ヘラ、アテネ、アフロディテという三女神のあいだで美を競った際に、アフロディテが審判役のトロイア人パリスに、賄賂として、自分を選ぶ見返りに世界一の美女ヘレネーを与えると約束し、最高の美神に選ばれると、約束どおり、すでにスパルタ王の后だったヘレネーを与えたために生じた戦争だった。后と財宝を奪われ激怒したスパルタ王がギリシア連合軍を結成してトロイアを攻撃し、后と持ち去られた財宝を奪還しようとしたのである。元をたどれば、この戦争はアフロディテの「奸計」を淵源として生じたものだった。ヘシオドスの指摘したとおりに、この女神は「奸計」を発揮したのである。

しかも、『イリアス』と『オデュッセイア』のなかで語られるアフロディテの行動に注目してみると、戦場で負傷した息子アエネーアスを守りながら待避させるのを除けば（『イリアス』第五書、三一一～三一七行）、全体

的にネガティブな描き方になっており、『アエネーイス』のように肯定的ではない。

『イリアス』の第三書のなかで、アフロディテは、パリスが戦場でヘレネーの元夫メネラーオスと一騎打ちをして負けそうなところを助け、靄で隠して市内の宮殿まで待避させる（第三書、三六九～三八二行）。さらにアフロディテは、市壁の上にいたヘレネーを無理矢理パリスの休息しているベッドへ行かせる（同、三八三～四四七行）。パリスはたしかに一旦は命拾いをするけれども、結果としては、戦闘中の敵前逃亡と性行為とによって、ヘレネーとともに、ますますトロイア市民から憎悪されることになる。

注目すべきことに、右の場面のヘレネーには、パリスのところへ行くのを嫌がったり、パリスの高言と臆病をなじったりするなど、夫のもとから駆け落ちしたころの熱愛からは冷めている様子が窺える。この場面については、『オデュッセイア』の第四書を併せ読むべきだろう。そこでは、トロイア戦の数年後、夫のもとに帰っているヘレネーが――その環境では、ある意味で当然ながら――かつてのパリスとの駆け落ちとアフロディテの関与とについて否定的に語る。

> トロイアの女たちは大きな泣声をあげましたけれども、わたしは嬉しく思っておりました。アフロディテが、わたしを大切な生まれ故郷からあの町に連れて行き、わたしの子供や、夫婦の閨、知恵にも風貌にも欠点のない夫を捨てさせたことを苦痛に思っておりました〔*The Odyssey*, iv, ll. 257-264〕。

『オデュッセイア』のなかでは（第八書）、アフロディテについて、夫のヘファイストスに浮気がばれたときの

成り行きも物語られる。そこでは、アフロディテが夫の眼を盗んで軍神アレスと情交を重ねているのに気づいた太陽神ヘリオスがそれを夫に知らせたこと、夫は、鍛冶の高度な技術を使って青銅製の眼に見えないほど細かな網を作り、それを自宅のベッドに仕掛けたこと、そうとは知らずに抱き合ったアレスとアフロディテを絡め取り、神々を呼んで、ふたりを笑いものにしたことが語られる（同、二六六～三三四行）。アフロディテについては、浮気者としての側面も注目されていたのである。

『イリアス』（第五巻、三一八～三八〇行）は、アフロディテが、戦場で人間の男の槍で手首に傷をうけると、母親に泣きつく弱虫の側面を描いている。

そればかりでなく、注目すべきことに、エウリーピデス（Εὐριπίδης; Euripides, c. 480–c. 406 BC）の戯曲『ヒッポリュトス Ἱππόλυτος; *Hyppolytos*』（前四二八）は、アフロディテが、自分を崇拝しない若者を、奸計を弄して殺害させる残酷な存在として描いていた。

アフロディテと呼ばれていたころのギリシア世界では、この女神はあまり存在感が大きくなく、しかも、かなり否定的に描き出されていたようである。

しかしローマが建国されて数百年が経過するころから、「ウェヌス（＝ヴィーナス）」と呼ばれるようになったこの女神の存在感が増していった。

史家リウィウス（Titus Livius; Livy, 64/59 BC–AD 12/17）は、前二九五年に、ヴィーナスの神殿が、ローマ市内の大競技場の近くに建設されたことにふれている。これは、公に不倫の罪に問われた既婚婦人たちが支払った罰金を集めて建てられたのだという〔Livy, X. xxxi, 9〕。「ウェヌス・オブセクエンス（寛容なるヴィーナス）

の神殿 Aedes Veneris Obsequentis; Temple of Venus Obsequens」と称されるものだが、建設の縁起から見て、性愛と浮気の女神アフロディテの特徴を継承しているようである。しかし、リウィウスが前二一七年および二一五年の出来事として記述するヴィーナスの神殿は、右のヴィーナスの神殿とは大きく性格を異にしている。

この神殿は、「ウェヌス・エリュキーナ（エリュクスのヴィーナス）の神殿 Aedes Veneris Erycinae; Temple of Venus Erycina」と称されるものである。エリュクスはシチリア島の北西岸の町で、そこにヴィーナスの神殿があった。前二一七年、ローマが、イタリア半島に侵入してきたハンニバル率いるカルタゴ軍に大敗を喫して存亡の危機に陥ったときに建設を約束した神殿のひとつが、このエリュクスのヴィーナスに捧げる神殿である〔Livy, XXII, ix. 9–x. 10〕。神殿は、その二年後に、宣誓どおり、ローマ中心地区のカピトルの丘の上に建てられた〔Livy, XXIII, xxxi. 9〕。この「ヴィーナスの神殿」はローマの指導者たちが国家の守護を祈願し、それが実現したゆえに建てたもので、「ウェヌス・オブセクエンス（寛容なるヴィーナス）の神殿」とは性格が異なり、ヴィーナスに国家の守護神としての新たな権能を見出したものであることがわかる。

リウィウスもふれるし、別の史家カッシウス・ディオ（Cassius Dio, c. AD 155–235）も特筆するのが、前四六年に献堂されたもうひとつの「ヴィーナスの神殿」、すなわち、「ウェヌス・ゲネトリクス（母なるヴィーナス）の神殿」だが、この神殿については、のちに詳しく取り上げることにする。とりあえずは、ローマ市中にさらにもうひとつのヴィーナスの神殿が建てられたことだけに注目しておこう。

では、ローマ時代の文章のなかではヴィーナスはどのように描き出されていただろうか。哲学者ルクレーティウス（Titus Lucretius Carus, c. 99–c. 55 BC）は、『事物の本質について *De Rerum Natura*』（前一世紀）のなか

で、この女神をつぎのように称えた。

アエネーアスとその子孫たちを産み、人々と神々の喜びである、養いの女神ヴィーナス、空を滑りゆく天宮のもと、船舶の溢れる海と作物の実る大地を満たす女神、命あるすべてのものは貴女によって懐胎され、成長して太陽の光を見る。強風は貴女から逃げ去り、暗雲も貴女が来れば逃げ去る。生成に巧みな大地は貴女のために快い花々を生え出し、貴女には広がる海も微笑み、天も穏やかにされ、光を広く輝かせる〔Lucretius, I, ll. 1-9〕。

ここでは、女神ヴィーナスは豊穣と平安をもたらす存在として提示されており、アフロディテ時代に見られた、やっかいな恋情を引き起こす存在、トラブルメーカー、浮気者、残酷な存在、弱虫、といった否定的側面は見当たらない。この肯定的評価への変化の根本的原因は、おそらく冒頭の一句が示唆している。すなわち、「アエネーアスとその子孫たちを産み」という箇所である。のちにウェルギーリウスが『アエネーイス』のなかで縷説し、史家リウィウスもふれる伝承だが、それによれば、ローマは、ギリシア連合軍によって滅ぼされた都市トロイアの将軍アエネーアスが礎を築いたとされた。伝承によれば、また、そのアエネーアスは、トロイア人アンキーセスと女神ヴィーナスとのあいだにできた男子だとされた。いいかえれば、ローマはトロイアを再興した都市なのであり、ヴィーナスはその始祖を生んだのであるから、ヴィーナス無しでは、その後のローマは存在しなかったことになる。ギリシア側から語られた物語――『イリアス』や『オデュッセイア』――のなかでは否定的に描か

れたアフロディテ＝ヴィーナスだが、敵対したトロイア側であるローマから見れば、ヴィーナスは建国に不可欠な存在として肯定的に描かれて当然だった。

さらに、ヴィーナスに対するルクレーティウスの肯定的評価の背後には、対カルタゴ戦による存亡の危機に際してローマを守護してくれた女神への感謝の気持ちを読み取ってもよいだろう。

ウェルギーリウスの『アエネーイス』のなかで、ヴィーナスが、ローマ建国の助け手として欠くべからざる役割を与えられていたことについては、前節で述べたので、繰り返さない。

『アエネーイス』とともに古典期ローマを代表する文学作品であるオウィディウス（Publius Ovidius Naso, 43 BC–AD 17/18）の『変身物語 *Metamorphosen libri; Metamorphoses*』（紀元後八年）のなかでもヴィーナスはひんぱんに登場して、存在感が大きい。この物語のなかのヴィーナスは、一面では、かつてのアフロディテの特徴も受け継いでいる。そのひとつが、『オデュッセイア』のなかでもすでに語られた軍神マルス（＝アレス）と夫ウォルカーヌス（＝ヘファイストス）とに関わる浮気な女神の側面である（第四書、一六七～一八九行）。さらに、『変身物語』のなかでは、ヴィーナスは、事件後、マルスとの浮気を夫に告げ口した太陽神を恨んで仕返しをする。ヴィーナスは、太陽神にひとりのニンフを恋させ、太陽神はこのニンフと情交し、それに気づいたニンフの姉妹による父親への告げ口の結果、父親がニンフを生き埋めにして殺してしまい、太陽神は深く悲しむのである（同、一九〇～二五五行）。この逸話のヴィーナスには、残酷なところもあるかつてのアフロディテの特徴が受け継がれている。ただし、この逸話のなかの仕返しは、エウリーピデス『ヒッポリュトス』のなかのアフロディテが下す罰ほど理不尽なものではない。

われわれはむしろ、『変身物語』のなかで語られるヒッポリュトスの物語には（一五書、四九七～五四六行）、アフロディテ＝ヴィーナスがまったく関与していないことに注目するべきだろう。ここでのヒッポリュトスは、「父親の信じ易さと悪辣な継母の欺瞞」によって落命する（四九七～四九八行）。しかし、エウリーピデスの『ヒッポリュトス』では、継母のヒッポリュトスへの恋情自体が、そもそもはアフロディテの「企みにより激しい恋情が胸を捉え」た結果であって〔Euripides, *Hippolytos*, ll. 27-28〕、アフロディテは継母を自分の復讐の道具として利用したのだった。『変身物語』の作者オウィディウスは、ヒッポリュトスの不幸な死の話から、おそらくは意図的にアフロディテ＝ヴィーナスの存在を消去し、ネガティブな側面を減少させようとしたのである。

『変身物語』のなかの、これもよく知られたピグマリオンの逸話に見られるヴィーナスについては（第一〇書）、むしろ恋情を司る際の優しさが目立っている。キプロス島に住んだ男ピグマリオンは、売春をする女たちを見ておぞましく思い、人間の女を娶らず、白大理石で理想どおりの女性像を作りあげ、その石像に恋をする。ピグマリオンが、ヴィーナスに、あの石像のような女を妻として与えてくれるように祈ると、ヴィーナスはピグマリオンの本心を理解し、石像を人間の女に変えてくれる。ピグマリオンとこの女は夫婦となり、ふたりのあいだには九ヶ月経ぬうちに娘も生まれるのである（同、二四三～二九七行）。

こうしてギリシアのアフロディテ時代と比べると、ローマのヴィーナスは存在感が増したばかりでなく、評価が少なからず肯定的なものへと変化し、とりわけローマ建国の助力者、ローマの守護者という性質が追加されていったといえる。

三　アウグストゥスとヴィーナス、ハドリアーヌスとヴィーナス

前節でわれわれは、古代のローマで女神ヴィーナスの存在感が増し、性質が肯定的に描かれるようになり、ローマ建国の助力者と守護者という性質が付加された様子を見た。その変化が如実に表れているのは、何といってもウェルギーリウスの『アエネーイス』だが、変化の原因は何だったのだろうか。オウィディウス『変身物語』は、その問への答えを推察させてくれる。

『変身物語』は不思議な終わり方をする本である。この本は、人間が神々の力によってさまざまな動物や植物に変身させられた数々の出来事を物語るのだが、最後は唐突に、当時のローマ世界の支配者アウグストゥス（Imperator Caesar Divi Filius Augustus, 63 BC–AD 14）への賛美と阿諛をもって終わる（第一五書）。

この箇所で、ユリウス・カエサル（Gaius Iulius Caesar, 100–44 BC）は暗殺されたのち天に昇り神となったと語られるが、注目したいのは、神となったカエサルがアウグストゥスをつぎのように評価することである。

> 自分の息子の数々の善行を見て、カエサルは、自分の業績よりも偉大であることを認め、凌駕されていることを喜ぶ〔Ovid. xv. ll. 850–851〕。

ここで「自分の息子」というふうに言及されているのは、アウグストゥスである。アウグストゥスは、周知の

とおり、ユリウス・カエサルの養子となった人物である。この箇所では、作者オウィディウス自身が、ユリウス・カエサルによる評価というかたちにしながら、アウグストゥスを賛美・阿諛しているのである。

オウィディウスは、つぎの一文では、アウグストゥスを最高神ユピテルに例えながら賛美・阿諛している。

ユピテルは天の高地を支配し、宇宙の三層の王国を支配している。地上は、アウグストゥスの支配下にある〔Ovid, xv. ll. 858-860〕。

神々へのつぎの祈りも、アウグストゥスへの直接的阿諛である。

われらの祈りを聞き入れたまえ。アウグストゥスが支配している世界を捨てて天に昇り、われらから離れてしまう日が、われら自身の生涯から遠く離れ、遅くなりますように〔Ovid, xv. ll. 868-870〕。

このような賛美と阿諛の原因は何だったのか。われわれは、作者オウィディウスにとって、本の内容の展開からは無理をしながらでも、賛美と阿諛の言葉を書かねばならなかったほどに、アウグストゥスという絶対的かつ独裁的な権力者が恐ろしい存在だったことを想像してみるべきだろう。

ローマ帝政期の実態を身を以て知っていた史家カッシウス・ディオは、アウグストゥスの権力の特徴として、つぎの諸点を挙げている。

一、国家の全資産と軍事力を独占していたので、つねにあらゆる事柄について絶対的支配権を有したこと〔Dio, LIII. 16. 1-3〕。
二、権力の行使にあたって、いかなる法律にも法令にも束縛されなかったこと〔*Ibid.*, LIII. 18. 2〕。
三、世俗の全権を掌握しているばかりか、大祭司として宗教権力も掌握していたこと〔*Ibid.*, LIII. 17. 7〕。
四、私人の生活ぶりを調査する権利も有したこと〔ibid.〕。
五、他の行政官の施策を無効にする権限を有したこと〔ibid.〕。
六、行動ばかりか言葉によっても、いささかでも傷つけられた場合には、その犯人を裁判にかけることなく処刑できたこと〔ibid.〕。

これは、つまり、アウグストゥスの絶対権力の行使を制限するものがシステム上はまったく存在せず、唯一、アウグストゥス自身の良識と自制心のみによって、それが制限される可能性があったということである。したがって、住民はつねに潜在的な恐怖のもとに暮らしていたと見ることができる。しかも、その恐怖にはアウグストゥスの遠くない過去の行動による裏付けがあった。

たしかに右の独裁権力を元老院の議決により委ねられた頃からのアウグストゥスは寛容と抑制を特徴としていたけれども、それ以前の行動には暴力性と冷酷さが顕著だった。

カッシウス・ディオと同様に帝政時代に暮らした史家スエトーニウス（Gaius Suetonius Tranquillus, c. AD 69–c. 122）は、アウグストゥスが執政官職を武力を使って奪取した事件を記録している〔Suetonius, I, XXVI. 1〕。それによれば、このとき、まだ二〇歳だったアウグストゥス――ただし、まだこの贈り名を得ていなかったが

――は、軍団を率いてローマに迫り、軍事使節団を元老院に派遣して、自分を執政官に任命することを迫り、元老院が渋ると、使節団長はマントの下の剣を見せ、「諸兄が彼を執政官にしないのであれば、これがするだろう」と凄んだという。元老院はこの武力をちらつかせた脅迫に屈し、要求を認めた。のちにカッシウス・ディオもこの事件を取り上げ、軍事使節団の数を四〇〇名だったと記録している〔Dio, XLVI, 43. 4〕。

ディオによれば、同じ頃、アウグストゥスは養父ユリウス・カエサルの暗殺に関わった人たちへの復讐をおこなった。その際、アウグストゥスは形式を整えるために彼らを裁く法律を定め、元老院の命令により属州に派遣されていた者たちもふくめて、出廷しない者については欠席裁判のまま有罪として人権を剝奪し、財産を没収した。また、暗殺に関わっていなくても、自分に敵対する者は有罪とした場合がある〔Dio, XLVI, 48. 2-4〕。

スエトーニウスによれば、その後、アントーニウスとレピドゥスのふたりと組んで一〇年間、三頭政治をおこなった際には、アウグストゥスは広く憎悪されたという。その理由は、たとえば、つぎのような行動を取ったからである。あるとき、アウグストゥスが軍人たちに演説をしていた際、市民も参列を許されたなかで、メモを取っていた人物をスパイと見なし、その場で殺させた。また、トーガの下に石版を持ってアウグストゥスに近づいたひとりの高官は、剣を隠し持っていると疑われ、拷問された上、アウグストゥス自身がその目をくり抜いたあとで処刑された〔Suetonius, II, XXVII. 3-4〕。

三頭政治に際しては、三人のいずれかに対して、過去のいずれかのときに敵対した多くの者たちが殺され、財産が没収された。高名な弁論家の元老院議員キケロもこのとき殺されたひとりである。多くは自宅で殺されたが、街路や広場、神殿の周囲でも殺された。殺害された者たちの首は晒され、死体は遺棄されて野犬や野鳥の餌と

なったり、テベレ川に投げ捨てられたりした〔Dio, XVII, 2. 2〕。なお、ディオによれば、アウグストゥスは、生来残酷でもなく、他のふたりと異なり政治経験も浅かったから、権力を共有するためだけにこの殺戮に与したのだという〔*Ibid.*, 7. 2〕。しかし、スエトーニウスによれば、アウグストゥスは、他のふたりが敵対者たちを殺戮しようとした際にしばらく反対したものの、一旦殺戮が開始されると、他のふたりよりも厳しく実行したという。アントーニウスとレピドゥスは、他者の口添えや本人の嘆願に動かされることがあったが、アウグストゥスだけは誰も除外されてはならないと主張し、かつて自分を保護してくれた人も容赦しなかったという〔Suetonius, I, XXVII. 1-2〕。

このようにアウグストゥスについては暴力と冷酷さとを発揮した過去があり、絶対権力を制限するシステムが存在しない政治体制のなかで、暴力と冷酷さを再燃させない保証はなかった。いいかえれば、アウグストゥスの暴力と冷酷さについて、人々には確かな記憶が残っており、再燃を恐れる気持ちがぬぐい去れなかった。恐怖は確実に潜在していたのである。

話をオウィディウスに戻すなら、著作の内容の展開からは無理をしながらでも、賛美と阿諛の言葉を書かねばならなかったほどにアウグストゥスは恐怖をかき立てる存在だったのだと想像される。

実際に、その恐怖を証明するかのように、賛美と阿諛の言葉を著作に書き込んだオウィディウスは、やがてその甲斐もなく、アウグストゥスによって追放刑に処せられ、追放先で死去するのである。

さて、われわれはこのあたりで、アウグストゥスとヴィーナスとの結びつきに眼を向けなければならない。そ

の結びつきについても、『変身物語』は答えを示してくれている。つぎは、将来を予言するユピテルの発言である。

カエサルの名を継いだこの人物は、カエサルに課された重荷をひとりで背負うだろう、そして、父親の殺害に対して勇敢に仇を討った人物として、戦いに際しては、われら神々を同盟者とするだろう。……地上で人の住める土地はことごとく彼のものとなり、海もまた彼の支配するものとなるだろう〔Ovid, XV, 819-821〕。

注目すべきは、ここでアウグストゥスが「カエサルの名を継いだこの人物」と呼ばれていることである。のちに元老院から「アウグストゥス Augustus」の名を贈られることになるこの人物の誕生時の名前は「ガイウス・オクターウィウス Gaius Octavius」だった。それが、ガイウス・ユリウス・カエサル（Gaius Iulius Caesar）の遺言により「ユリウス家 Iulii」の一員となった。カッシウス・ディオによれば、ガイウス・オクターウィウスは、法手続きにしたがって正式にユリウス家の一員になった際に「ガイウス・ユリウス・カエサル・オクタウィアーヌス Gaius Iulius Caesar Octavianus」と改名した〔Dio, XLVI, 47. 4-7〕。その理由は、養子にされる際には、ほとんどすべての名を養父の名前から取るとともに、旧名のひとつを、かたちを少し変えて残すのが慣習だったからである〔ibid.〕。すなわち、養父の名前「ガイウス・ユリウス・カエサル」をそのまま使い、それに旧名の「オクターウィウス」を少し変えた「オクタウィアーヌス」を添えたわけである。

ただし、カッシウス・ディオはこの改名に関連して、ふたつ興味深いことを書いている。ひとつは、この正式

の改名に先立ち、ガイウス・オクターウィウスは、遺言によりユリウス・カエサルの養子にされたことを伝え聞くと、即座に「カエサル」と自称し始めたということである〔Dio, XLV, 3. 2-3〕。これは、自分をユリウス・カエサルの後継者だと主張し始めたということに他ならない。逆にいえば、もう自分は「オクターウィウス」ではないということである。

もうひとつ重要なことがある。ディオは、自分はこの人物を「オクタウィアーヌス」とは呼ばず、「カエサル」と呼ぶと宣言している。その理由は、「カエサル」の名が、「以後、ローマ人を支配してきた人たちのあいだで使われてきた」からである〔Dio, XLVI, 47. 7〕。事実、ガイウス・ユリウス・カエサル・オクタウィアーヌス以後の皇帝たちは、ごく少数の例外を除いて、ティベリウス・カエサル・ディーウィ・アウグスティ・フィリウス・アウグトゥス（＝ティベリウス帝）、ネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストゥス・ゲルマニクス（＝ネロ帝）、カエサル・プブリウス・アエリウス・トライアヌス・ハドリアーヌス・アウグストゥス（＝ハドリアーヌス帝）、カエサル・ガイウス・フラウィウス・ワレリウス・コンスタンティーヌス・アウグストゥス（＝コンスタンティーヌス帝）というように、いずれも「カエサル」と自称し、またそのように呼称されていった。

その場合、「カエサル」の呼称が「皇帝」の意味で普通名詞化したと見るべきではなく、むしろ代々の皇帝たちが「カエサル」の存在と権能を継承していったと見るべきだろう。その継承関係は、日本の歌舞伎役者が、たとえば「市川團十郎」や「中村歌右衛門」といった名跡を代々襲名してきたのと似ている。歌舞伎役者は、襲名によって「團十郎」や「歌右衛門」という存在そのものになるのである。役者たちにとって、「本名」よりも名跡の方がはるかに重要な意味を持つのであるし、襲名は養子がする場合が少なくない。それに似て、代々のロー

マ皇帝たちも、相続によったり、養子とされたり、暴力で奪取することによって、「カエサル」になっていった。われわれは、このような「カエサル」襲名がオクターウィウスから始まったことに注目すべきである。

ちなみに、スエトーニウスは、オクターウィウスによる「カエサル」襲名について、簡潔に、「大叔父〔＝ユリウス・カエサル〕の遺言」により「ガイウス・カエサル」の名を得たと書き〔Suetonius, II, VII. 2〕、著作中では、ごく自然に、オクターウィウスを多くの場合「カエサル」と呼び、ときどき「アウグストゥス」と呼んでいる。スエトーニウスの書き方から判断すれば、オクターウィウスは、「カエサル」と自称しただけでなく、一般に「カエサル」と呼ばれていたと見てよいだろう。

再確認しておくなら、オクターウィウスは、叔父ユリウス・カエサルの遺言により、ユリウス・カエサルの属した「ユリウス家」の一員となり、名前も「カエサル」もしくは「ユリウス・カエサル」となったのだが、われわれの課題にとって重要なのは、この大きな変化にともない、アウグストゥスと女神ヴィーナスとのあいだに密接な繋がりが生じたことである。

ユリウス・カエサルは、かねがね自分が女神ヴィーナスの子孫であることを喧伝していた。叔母の葬儀に際して、カエサルは、演壇からつぎのように演説した（前六七年）。

わたくしの叔母ユーリアの一家は、母方では王家から出ており、父方では不死なる神々の親戚であります。なぜなら、叔母の母親の家族名マルキイ・レゲスは王アンクス・マルキウスに発しており、わが一家がその分家であるユリウス家（Iulii）は女神ヴィーナスに発するからであります（Suetonius, I, VI. 1）。

すなわち、ユリウス・カエサルは、このとき、ユリウス家が元をたどれば「ユールス Iulus」に発し、ユールスはヴィーナスの孫だという伝承を真実だと主張したのである。伝承によれば、「ユールス」は、アエネーアスの息子であり、アエネーアスはアンキーセスと女神アフロディテ＝ヴィーナスとのあいだに出来た息子だとされていた。すなわち、この系譜によれば、ユリウス・カエサルはヴィーナスの子孫にあたることになる。

さらに、カエサルは、前四六年に実施された凱旋式に合わせて、新たに建て始めたヴィーナスの神殿の献堂式を催した（Dio, XLIII, 22. 2）。この神殿は「ウェヌス・ゲネトリクス（母なるヴィーナス）の神殿 Aedes Veneris Genetricis; Temple of Venus Genetrix」で、神殿はカエサルが建設中の「フォルム・ユリウム（ユリウスの広場）Forum Iulium」のなかに置かれていた。カエサルは、この「母なるヴィーナス」のための神殿を建設することにより、ヴィーナスが自分の一族の始祖であることを公に強調したのである。

ところで、注目しなければならないのは、紀元前四三年に、アウグストゥスが正式にユリウス家の一員となったとき、女神ヴィーナスはアウグストゥスにとっても始祖になったことである。ディオは、それを証する興味深い記述を残している。前四四年、アウグストゥスが護民官職を手にしたときの行動である。アウグストゥスは、まず群衆に向かって、カエサルが遺言で民衆に約束した金を配布するといい、さらにその増額も匂わせた〔Dio, XLV, 6. 3〕。

この後につづいて、「ヴィーナスの神殿」の完成を称えるために定められていた祝祭が催された。この祝祭

は、カエサルの存命中に約束されていたものだったが、その後、あまり顧みられなくなっていた…〈中略〉…。それゆえ彼〔アウグストゥス〕は、民衆を味方につけるため、自分の一族に関することは自分自身に関係することだとの理由を付け、自ら負担して費用をまかなった〔*Ibid.*, 6. 4〕。

この記述には、興味深い点がふたつある。ひとつは、ユリウス・カエサルが暗殺されたのち、カエサルの建てた「ヴィーナスの神殿」――すなわち「ウェヌス・ゲネトリクス（母なるヴィーナス）の神殿」――の完成祝いが中断されたままになっていたということである。これは、つまり、ユリウス・カエサルは、暗殺されたのち、国家と民衆にとって恩人と見なされるのか、敵と見なされるのか、しばらくは評価が定まらなかったということである。アウグストゥスは、民衆を味方につけることによって、ユリウス・カエサルの評価を肯定的なものにしようとしたわけである。

右の記述で興味深いもうひとつの点は、アウグストゥスが、ユリウス家の一員として、費用をまかなったことである。これにより、アウグストゥスは自分がユリウス家の人間であることを印象づけようとしたわけである。

さらにディオは、右の箇所につづけて、数日にわたり、夕刻、北の空に新しい星が見えた事件を語る。ディオはいう。この星は、大多数の人々によってユリウス・カエサルだと見なされた。アウグストゥスは、その星をユリウス・カエサルが不死の存在になって星々のなかに迎え入れられたのだと解し、「ヴィーナスの神殿」のなかに、青銅製のカエサル像を設置し、その頭に星を飾った〔Dio, XLV, 7. 1-2〕。アウグストゥスは、女神ヴィーナスの子孫であるユリウス・カエサルが神となって天にのぼったことを公にアピールしたのである。

重要なのは、そののち、紀元前二九年にアウグストゥスが絶対的支配権を掌握したとき、その権力の威勢により、ユリウス・カエサルの祖先である女神ヴィーナスは、「カエサル」であるアウグストゥスの祖先として確定されたことである。

これら、ユリウス・カエサルとアウグストゥスと女神ヴィーナスとをめぐる一連の動きには、興味深い相互依存関係が認められる。

一、ユリウス・カエサルは自身の権威付けの手段としてヴィーナスが先祖であると主張する。

二、オクターウィウスは、自己の権威付けのために、ユリウス・カエサルの子であることを強調する。

三、ユリウス・カエサルの権威は、絶対権力を掌握したアウグストゥスによって確立する。

四、ヴィーナスがユリウス・カエサルとアウグストゥスの祖先であることは、アウグストゥスの絶対権力によって確立する。

こうして絶対的支配者の祖先となった女神は、けっして全般的にネガティブな存在として描き出されてはならず、むしろ肯定的なイメージで描き出されなければならなかったはずである。ウェルギーリウスの『アエネーイス』とオウィディウスの『変身物語』は、それを如実に示しているといってよいだろう。

ところで、われわれは紀元後一二一年に、都市ローマのなかで「おそらくは最大のもっとも壮麗な」神殿――「ヴィーナスとローマの二重神殿」――を建て始めた皇帝ハドリアーヌスについても、女神ヴィーナスとの関係を考えてみなければならない。

それにあたり、古代ローマ史家のメアリー・ボートライトがこの神殿の特徴として挙げている三点に注目してみたい。

一、この神殿では、帝室を称揚する目的よりも、むしろ都市ローマとローマ市民を称揚する目的が重視されており、その点で帝室が建てた従来の神殿と異なっていること〔Boatwright, 132〕。この見方によれば、ユリウス・カエサルの建てたヴィーナスの神殿（「母なるヴィーナスの神殿」）とは性格が異なっていることになる。

二、この神殿はギリシア的特徴を顕著に見せていたが、それは、新たなローマ国家信仰をもってすべてのローマ人を統合しようとしたものだったこと。その理由としては、ハドリアーヌスがスペイン出身であって、神殿のギリシア的性格を意識的にローマ人に対してアピールしたと考えられること〔*Ibid.*, 132–133〕。ちなみに、いうまでもないことながら、ギリシアはすでに前二世紀からローマの支配下に置かれていたのである。

三、このローマ国家信仰はきわめて好評で、やがて三世紀には、二重神殿のなかのヴィーナス信仰の影を薄くし、キリスト教社会になった五世紀まで命脈を保ったこと〔*Ibid.*, 133〕。

いずれの指摘も専門家による精密な考察として傾聴すべきだが、われわれの関心から見て興味深いのは一と三である。

ボートライトの指摘した第三点については、四世紀に書かれた『ローマ皇帝群像 *Scriptores Historiae Augustae*; *Historia Augusta*』のなかの「ハドリアーヌス伝 "De Vita Hadriani"」が、この神殿を「ヴィーナスとローマの二重神殿」とは呼ばず、「都市ローマの神殿 Templum Urbis」と呼んでいることからも納得がゆく〔Aelius Spartianus, "De Vita Hadriani," XIX. 12〕。さらに、われわれの関心に引きつけていえば、ヴィーナスへ

の信仰がすでに紀元後三世紀の段階でこのように弱体化していたのであれば、紀元後三八〇年にキリスト教がローマ帝国の国教とされた以後の社会環境のなかで生き延びるのは困難だったろうという想像がつく。それだからこそ、キリスト教社会のまっただ中で書かれたダンテ『神曲』のヴィーナスは、存在が希薄になっていたのもよく理解できるのである。

ボートライトが指摘した第一点――すなわち、「ヴィーナスとローマの二重神殿」は、帝室の称揚よりもローマという国家とローマ市民を称揚するものだった、それゆえ帝室が従来建設した神殿とは異なっていた――という点については、注意すべきことがある。ひとつは、この指摘は、この神殿が帝室を称揚する性格を持っていなかったという意味ではないこと、もうひとつは、この指摘が帝室自体の建設した諸神殿に限定されていることである。

そもそも帝室の称揚という目的と国家・国民の称揚という目的は、皇帝ひとりが国家の全権力を独占している政治体制おいては截然と区別できるはずがなく、むしろ渾然一体となっていたと見るべきである。また、われわれは、ハドリアーヌスがアウグストゥスを尊崇し、かつてアウグストゥスがおこなった政策を踏襲しようとする傾向を見せたことも思い出すべきである。また、その際に併せて、初代アウグストゥス以降の皇帝たちが、ほぼ例外なく「アウグストゥス」と自称もすれば他称もされ、ハドリアーヌス帝も、すべての名前を並べれば、カエサル・プブリウス・アエリウス・トラヤーヌス・ハドリアーヌス・アウグストゥス（Caesar Publius Aelius Traianus Hadrianus Augustus）だったことを思い出すべきである。これは、つまり、ハドリアーヌス帝が初代の「カエサル」を称揚すれば、同時に間接的に自分自身を称揚することになり、初代の「アウグストゥス」を称

揚すれば、同時に間接的に自分自身を称揚することになったということに他ならない。それは、当代の「團十郎」が初代あるいは数代前の「團十郎」を称揚すれば、間接的にはその芸風を継承する自分自身を称揚することになるのと同様である。

ハドリアーヌスが初代アウグストゥスを称揚した例として、われわれはハドリアーヌスが、フォロ・ロマーノのなかに、「アウグストゥスのフォルム」を建設したこと〔"De Vita Hadriani," XIX. 10〕や、スペインのタッラゴーナ滞在中に私費を投じて「アウグストゥスの神殿」を再建したことを挙げることができる〔*Ibid.*, XII. 4〕。また、ハドリアーヌスが初代アウグストゥスの政策を尊重した例としては、帝位に就くと、前帝トラヤーヌスの領土拡大政策を一変し、かつてアウグストゥスが後進の皇帝たちのために定めた国境を守ることを施政方針として定めたことを挙げることができる〔*Ibid.*, V. 1〕。

ハドリアーヌスが在任中におこなった活発な建築活動もまた、初代アウグストゥスの政策を踏襲したのだといえるだろう。ハドリアーヌスは「あらゆる場所に、数限りなく多くの公共建築物を建設した」〔"De Vita Hadriani," XIX. 9〕のだが、アウグストゥスもかつて活発な建築活動をおこなった人物だった。アウグストゥスが、ユリウス・カエサルの献堂した「ヴィーナスの神殿」を完成させたことは、すでにふれたとおりである。ディオの語るところによれば、アウグストゥスはまた、前二八年、各種の神殿に関して、個人が建立したものについては、子孫が存命であれば、その子孫に修復を命じたが、その他の神殿については自ら修復した。さらに、注目すべきことに、このときアウグストゥスは、自分が修復したことは明記せず、創立者の名前を残した〔Dio, LIII. 4-5〕。ハドリアーヌスもまた、過去の建物の再建・修復に当たっては、「すべてについて、元の建設者の名

前をもって献堂した」のである〔"De Vita Hadriani," XIX. 10〕。よく知られている例をあげれば、ハドリアーヌスは、アウグストゥス時代に建設され、その後消失したパンテオンを再建した際にも、このやり方にしたがい、元の建設者アグリッパの名前をファサードに刻印し〔ibid.〕、それが今に残っている。

古代の文献は、ハドリアーヌスによる「ヴィーナスとローマの神殿」建設について、短くふれるだけで、しかも一見些末なことしか述べていない。『皇帝群像』は、この神殿の建設に際して、もとはその場にあったネロ帝の巨大な立像を、二四頭の象の力を使って移動し、立像からネロの顔を削り落として太陽神に捧げたという〔"De Vita Hadriani," XIX. 12-13〕。ディオは、ハドリアーヌスが他人の才能をねたむ性格だった例のひとつとして、「ヴィーナスとローマの二重神殿」の設計を自分でおこない、その設計図を高名な建築家アッポロドールスに見せたところ、女神像が大きすぎて、女神たちが神像安置所から出たいと思っても出られない、と批判されて立腹し、この建築家を殺したという〔Dio, Epitome of LXIX, 4. 3-6〕。しかし、われわれは、これらの記述から、ハドリアーヌスが、他の建築物にも増して、この神殿の建設に自ら真剣に取り組んだ様子を読み取るべきだろう。またわれわれは、この取り組みについても、ハドリアーヌスは「カエサル」であり、「アウグストゥス」であったことを思い出すべきだろう。初代の「カエサル」はヴィーナスの子孫であり、ハドリアーヌスは「カエサル」であるのだから、ハドリアーヌスもヴィーナスの子孫なのである。「ヴィーナスとローマの二重神殿」はハドリアーヌスの祖先を祭る神殿でもあった。

ボートライトによる指摘が帝室の建設した諸神殿に限定されている点に関しては、すでに見た「ウェヌス・エリュキーナ（エリュクスのヴィーナス）の神殿」（紀元前二一五年）を思い出すと良い。カルタゴ軍からの手痛

い敗戦を機に国家の存続を祈願して建てられたこの神殿は、すでに三〇〇年前から国家の守護神としての権能を期待されていた。その点で、この神殿は、国家・国民の称揚を目的としたという「ヴィーナスとローマの神殿」と類似していた。

しかしまたわれわれは、この国家の守護神としての「ウェヌス・エリュキーナの神殿」についても、皇帝たちからは帝室に関わる奉納がなされたことに注目したい。スエトーニウスは、カリグラ帝（Gaius Iulius Caesar Augustus Germanicus, “Caligula,” 在位、紀元後三七～四一）に関連して、その王妃が夭折した息子をクピドの姿の像につくり、「カピトルのヴィーナスの神殿」に奉納したと記している〔Suetonius, IV, VII〕。「カピトルのヴィーナスの神殿」、すなわち「ウェヌス・エリュキーナの神殿」である。スエトーニウスはまた、ガルバ帝（Salvius Sulpicius Galba Caesar Augustus, 在位、紀元後六八～六九）について、真珠と宝石でつくったネックレスを運命の女神像に捧げる予定でいたが、気が変わり、「カピトルのヴィーナス神殿」に奉納したところ、運命の女神が夢に現れて苦情を述べたという出来事を記している〔Suetonius, VII, XVIII. 2〕。いずれも帝室と国家との区分が曖昧なところで起きた出来事と見ることができるだろう。

おわりに

本稿では、女神ヴィーナスについて、それがどのような存在だったのかという観点からではなく、ヨーロッパの教養人であれば誰もが知っていた文献のなかでどのように表現されていたのかという観点から――すなわち、

表象史の観点から――見直してみた。取り扱った期間は、およそ、紀元前三世紀頃から一五世紀頃まで、なかんずく紀元前一世紀から二世紀頃までである。

女神ヴィーナスは、おそらくはキリスト教が主張してきた「神」とはもっとも異質な神々のひとりである。したがって、キリスト教社会のなかにおいてであれば、ヴィーナスの存在の強弱が、社会におけるキリスト教の強弱を計るリトマス試験紙の役目も果たすだろう。ダンテ『神曲』のなかに見られたヴィーナスの希薄さはキリスト教の強力さの表れだったろうし、ポリツィアーノやボッティチェッリ以降に見られるヴィーナスの復活はキリスト教の力の衰えの表れだったろう。

ヴィーナスについては、もうひとつ、古代ローマの第二次ポエニ戦争期以降、とりわけ紀元前後以降にローマ国家の守護神としての権能が付加された興味深い事実が認められる。本稿では、代表的な文献における表現を検討しながら、その原因を、大きく見れば、ローマという国家の起源に関する伝承――すなわち、滅ばされたトロイアをイタリアにおいてローマとして再興したアエネーアスがヴィーナスの子だとする伝承――にあるだろうと推察した。これは、パオルッチ〔Paolucci, 33-35〕による同様の指摘を具体的に裏付けるものとなった。さらに、ポエニ戦争の危機に際してローマ国家を守護してくれたと見なされたことにも原因があるだろうと推察した。

しかし、ローマ国家の守護神としてのヴィーナスに関連して、本稿では、何にもまして、ユリウス・カエサルとオクターウィウスによるその名の「襲名」(「ユリウス・カエサル・アウグストゥス」)、および以後のローマ皇帝たちによる「カエサル」と「アウグストゥス」の「襲名」に注目した。そこには、女神ヴィーナスをめぐる興味深い政治利用が見られた。すなわち、ユリウス・カエサルは、祖先をヴィーナスだと主張することにより自己

の権威付けをおこない、アウグストゥスは「ユリウス・カエサル」となることによって、自身の祖先もヴィーナスだと主張したが、その一方で、アウグストゥスの絶対権力の確立によって、ユリウス・カエサルの権威も確立し、それにともなって、ヴィーナスの権威も確立した。皇帝権力と国家権力とが渾然一体となっていた帝政期ローマにおいては、ヴィーナスは皇帝たちの祖先神であるとともにローマ国家の守護神ともなったのである。その状態は、ややのちに、やはり「カエサル」と「アウグストゥス」の名を襲名したハドリアーヌス帝の場合にも基本的に同様だったと考えられる。その表れが、帝によって建設された「ヴィーナスとローマの神殿」だったろう。

女神ヴィーナスをめぐる表象史については、元来は南欧地中海の存在である女神がアルプスの北でどのように受容され変容したのかという興味深い問題や、二〇世紀美術本流のなかで姿を消すなかでどのような変質をしていたのかという興味深い問題があるのだが、それらの点については今後、別所で論じたいと思う。

参考文献

Del Monti, Claudia (a cura di). [2010] *Il Tempio di Venere e Roma nella storia*. Milano: Mondadori Electa.

Dante Alighieri. [1993] Giovanni Fallani & Silvio Zennaro (a cura di). *Divina Commedia*. Roma: Newton Compton.

Dio's Roman History. [1914–1927] 9 vols. With an English translation by Earnest Cary. (Loeb Classical Library) Cambridge, Mass.: Harvard University Press & London: William Heinemann.

Euripides. [1995; 2005] David Kovacs (ed. & trans.) *Children of Heracles; Hyppolytos; Andromache; Hecuba*. (Loeb Classical Library) Cambridge, Mass. & London: Harvard University Press.

Hesiod. [2006] Glenn W. Most (ed. & trans.) *Theogony; Works and Days; Testimonia*. (Loeb Classical Library) Cambridge, Mass. & London: Harvard University Press.

Historia Augusta. [1921–1932] 3 vols. With an English translation by David Magie. (Loeb Classical Library) Cambridge, Mass. & London: Harvard University Press.

Homer. [1924; 1925] *The Iliad*. 2 vols. With an English translation by A. T. Murray. (Loeb Classical Library) Cambridge, Mass.: Harvard University Press & London: William Heinemann.

Homer. [1919] *The Odyssey*. 2 vols. With an English translation by A. T. Murray. (Loeb Classical Library) Cambridge, Mass.: Harvard University Press & London: William Heinemann.

Livy. [1919–1967] (*Ab Urbe Condita*) 14 vols. With an English translation by B. O. Foster, et al. (Loeb Classical Library) Cambridge, Mass.: Harvard University Press & London: William Heinemann.

Lucretius. [1975; 1992] *De Rerum Natura*. With an English translation by W. H. D. Rouse, and revised by M. F. Smith. (Loeb Classical Library) Cambridge, Mass. & London: Harvard University Press.

Ovid. [1916] *Metamorphoses*. 2 vols. With an English translation by Frank Justus Miller. (Loeb Classical Library) Cambridge, Mass.: Harvard University Press & London: William Heinemann.

Paolucci, Fabrizio. [2003] "Dall' Ellade a Roma: mutazione di un'iconografia," in Maria Sframi (a cura di), *The Myth of Venus / Il mito di Venere*. Milano: Silvana Editoriale.

Poliziano, Angelo. [1992; 2000] *Stanze; Orfeo; Rime*. Milano: Garzanti.

Richardson, Jr., L. [1992] *A New Topographical Dictionary of Ancient Rome*. Baltimore & London: The Johns Hopkins University Press.

Schilling, Robert. [1982] *La Religion Romaine de Vénus depuis les origines juqu'au temps d'Auguste*. 2me ed. Paris: Éditions E. de Boccard.

Suetonius. [1998; 1997] (*Lives of the Caesars*) 2 vols. With an English translation by J. C. Rolfe. (Loeb Classical Library) Cambridge, Mass. & London: Harvard University Press.

Virgil. [1935] Vol. I: *Eclogues; Georgics; Aeneid, I–VI.* (Loeb Classical Library) Rev. ed. With an English translation by H. Rushton Fairclough. Cambridge, Mass.: Harvard University Press & London: William Heinemann.

Virgil. [1934] Vol. II: *Aeneid, VII–XII; The Minor Poems.* (Loeb Classical Library) Rev. ed. With an English translation by H. Rushton Fairclough. Cambridge, Mass.: Harvard University Press & London: William Heinemann.

浦　一章　他（編）[2010]『ヴィーナス・メタモルフォーシス―国立西洋美術館「ウルビーノのヴィーナス展」講義録』　三元社

青柳　正規、渡辺　晋輔（編）[2017]『ART GALLERY テーマで見る世界の名画　1　ヴィーナス―豊穣なる愛と美の女神』　集英社

高橋　朋子 [2016]『ウェヌス―豊穣からエロスへ』　悠書館

渡辺　晋輔　他（編）[2008]『ウルビーノのヴィーナス―古代からルネサンス、美の女神の系譜』　国立西洋美術館／読売新聞東京本社

註

（1）　本稿の和訳は、以下すべて拙訳である。